

第13回

小さな助け合いの物語賞

エッセー
(作文)
募集

誰かを助けた、誰かに助けもらった記憶…
どちらもあなたの人生を豊かにしたに違いありません。
そんな心温まる感動を、大勢の人にも分けてください。

あなたの文章が心に灯をともし、読んだ人が、
また誰かのために何かをする。

そんな素敵な助け合いの輪が広がるかもしれません。

あなたの心さ
温かくしたストーリー
教えてくださいね。



締切
2022年
9月3日(土)必着

選考・発表: 10月21日(金)

協賛 全国信用協同組合連合会・全国信用組合企業年金基金

後援 金融庁・文部科学省・金融広報中央委員会

Shinkumi Bank

信用組合

しんくみ

ちかくにいるから、
チカラになれる。

“しんくみバンク”信用組合は「助け合い」から生まれた金融機関。
この懸賞作文を通じて「助け合い」の心が広まることを願っています。

第13回「小さな助け合いの物語賞」エッセー(作文)募集

テーマ

「誰かに助けもらったときの感謝の気持ち」、「助けたことで得られた豊かな心」、「助けて何かをしたときの感動」など(家族や友人、同僚など身近な関係での助け合いは対象外となります)、実体験をもとにした「小さな助け合い」がテーマとなります。

文字数

800～1200文字

締切

2022年9月3日(土)必着

応募方法

専用の応募用紙に次の①～⑩をご記入のうえ、作品と併せてご応募ください。

①表題(タイトル) ②氏名(ふりがな) ③郵便番号 ④住所 ⑤電話番号・メールアドレス ⑥年齢 ⑦性別 ⑧当コンクールを知ったきっかけ ⑨職業(または学校名・学年) ⑩エッセー(作文)の文字数

※専用の応募用紙および応募要項については主催者ホームページに掲載しています。

応募宛先

郵送

〒105-7208 東京都港区東新橋1-7-1 汐留メディアタワー 8F
「小さな助け合いの物語賞」応募事務局

メール

tasukeai@shinyokumiai.or.jp
メールタイトルは「助け合い応募」としてください。

賞の種類

しんくみ大賞

最優秀作品
1編/20万円(商品券)

しんくみきずな賞

人と人のつながり・きずなが感じられる作品
1編/10万円(商品券)

未来応援賞*

青少年を対象に、今後の人生にプラスとなるような助け合いの作品
2編/5万円(図書カード)

ハートウォーミング賞

助け合いから生じる人に対するおもいやり、やさしさが感じられる作品
10編/1万円(商品券)

※未来応援賞は、18歳以下(2023年3月31日時点)に贈られる賞です。

選考・発表

審査結果は10月中に一般社団法人 全国信用組合中央協会のホームページにて入賞者の作品・氏名・学校名を発表します。上位入賞者は10月21日(金)に東京で行われる全国信用組合大会で表彰します。

※新型コロナウイルス感染症の拡大状況により表彰式を中止する場合があります。

注意事項

- 応募作品は自作・未発表の個人作品に限り、連名での応募はご遠慮ください。
- 日本語作品のみが選考対象です。
- 応募作品について著作権侵害の争いが生じても、主催者は一切の責任を負いません。
- 入賞作の一切の権利は主催者に帰属し、主催者が自由に使用できることとします。
- 入賞作は主催者がインターネット上で使用したり、作品集を制作する場合があります。
- 応募に関する個人情報は、受賞作品の発表・連絡以外には使用しません。
- 応募作品は返却しません。
- 盗作・二重投稿は固くお断りいたします。左記行為が判明の場合、表彰および賞金の授与を取り消します。
- 選考過程に関するご質問には一切お答えできません。

主催

一般社団法人 全国信用組合中央協会

協賛

全国信用協同組合連合会・全国信用組合企業年金基金

後援

金融庁・文部科学省・金融広報中央委員会

必ず、
応募用紙を
添付してご応募
ください。

一般社団法人
全国信用組合中央協会





物語をあなたに お届けします。

昨年の受賞作品3編をご紹介します。

誰かが誰かを助けた小さな「物語」が、あなたの心を温めてくれたなら、

次はあなたの「物語」を届けてください。

しんくみ大賞

もらったバトンを渡してるだけ 山田のりこ

え、手があがらない。まぶたもあがらない。ありとあらゆる体の筋肉が自分の言うことをきかない……。突然そんな難病にかかった。それまでお産と歯医者以外ほとんど医者いらずだった私は七年前重症筋無力症と宣告され、ほぼ寝たきり状態になってしまったのだ。

日常の家事は夫や子どもたちがなんとかこなしてくれたが当時高1だった娘のお弁当作りまでは到底手が回らなかつた。当時仲良し四人組でお弁当を食べるのが娘の楽しみだったが仕方ない。でも一人ぼっちで学生食堂に行く娘のことを不慣れに思ってた。さつた娘の友達のお母さんから突然ラインが届いた。

「お弁当一つ作るのも二つ作るのも一緒です。もしよければお嬢さんの分のお弁当も私に作らせてください」と。思い出すだけで目頭が熱くなる。そんな厚かましいことお願いするのもどうかと思ったが、いろんな我慢や苦勞を強いていた娘のことを気遣ってかけてくださったお言葉だ。温かい二厚意に甘えさせていただくことにした。そのお友達と理系と文系でクラスが別々になるので、娘は高二からは自分で作ることにしたが、結局三学期の間一日も休まずにおいしい手作りのお弁当をいただくことになった。一生治らない難病とも言われ、何度泣いたことかわからないが、このように親身に私たちを助けてくださったたたくさんの善意に支えられて私は数年後元気を取り戻した。

人生山あり谷あり、時として地獄に突き落とされるように思う日もあるが、周りに仏さまのような人がいると救われるということをしみじみと実感した。

それから六年後、次男の同級生のお母さんが末期がんときた。私は思わず「私もお弁当が作れないときに助けてもらいましたので……」とラインを送った。やっとその時のご恩を返せるときがきたように思ったのだ。「いつもおいしいお弁当に息子も大喜びです。おかげさまで体はきついです。のりさんの大きな気持ちに包まれていることを感じます。心より感謝しています」とお亡くなりになる十日前にも丁寧なラインをもらった。思えばお別れのご挨拶だったのかも。しれない。

お弁当を作り始めてから二年目を迎えた。学年懇談会などで学校に行くと、何人かのお母さんたちから「今もお弁当作られてるって、すごいですね」とか「頭が下がります」といわれることもある。でも私は自分が苦しくて辛かったときにいただいて救われた思いやりのバトンを次の人に渡しているだけ。大きなことは何もできない、ただお弁当を二つ作るだけ。

今朝も息子と同級生用に同じお弁当を二つ作った私は、こんな難病患者でもできることがあると思うだけで生きている喜びを感じている。こんなささやかなことでも大きな生きがいとなっているのかもしれない。

パステースの中の千円

東京都・東京都立北園高等学校 中村 日向子

真夏の夕方、都営三田線日比谷駅。部活の練習が終わった後、私はいつも通りホームで電車が来るのを待っていた。帰宅ラッシュの時間帯と重なり、構内はかなり混雑している。電光掲示板で電車の時間を確認するために周りを見回すと、綺麗なグレイヘアのおばあさんが目に飛び込んできた。不安げにキョロキョロと周りを見渡しながら歩いていく姿から一瞬で、この人は困っているのだと分かった。

引っ込み思案の私は何度も迷った末、頭の中でシミュレーションを繰り返して「どうかされましたか？お一人ですか？」と思い切って声をかけた。「夫(おとうさん)がいなくてねえ。おばあさんは不安そうな声で答えた。どうやら旦那さんとはぐれてしまったらしい。「じゃあ一緒に旦那さん探しましょうか。」と言いかけたその時、おばあさんの鞆に赤いカードがついているのに気が付いた。ちょうど家庭科の授業でそれについて学んでいた私は、すぐにそれがヘルプカードだということが分かった。

急いでポケットから携帯電話を取り出し、緊急連絡先に電話をかけて事情を話す。電話にて旦那さんは焦った様子で、「すぐそちらに行きますから」と言った。十五分ほど待つと旦那さんは迎えにやってきました。聞けば、観劇帰りにふたりで歩いていたところ、はぐれてしまったそう。おばあさんは認知症なのだとい

う。そのおばあさんといえは安心からだろうか、焦っている旦那さんを横目にごやかな笑みをうかべていた。「申し訳ない」ありがとうね」と繰り返す旦那さん。「いえ、あまりお気になさらないください」と言って別れを告げ、やってきた電車に乗ろうとしたとき、「あ、お嬢ちゃん！」と呼び止められた。振り返ると旦那さんが「これ、貰ってください。」といいながら几帳面に三つ折りにされた千円札をこちらに差し出した。「そんな、いただけないですよ。いいです、いいです」

何度もそう言う私に旦那さんは「お礼をしないんじゃこちらの気が済まない」と言った。発車のベルが鳴り始めたので、「では、ありがたかったです。大事に使います」と伝えて電車に乗りこんだ。家に帰りついても私はその千円札を見つめていた。高校生にとっての千円は結構な大金だ。そのうえ引っ込み思案の私が初めての人助けで貰ったお金なんでもったいなくてどう使えばいいかわからない。しばらく考えた末、もし私が誰かに助けてもらったときにあの旦那さんみたいに渡す、お礼の千円にしようと思った。その時が来たらいつでも取りだせるように、今でもその千円札はパステースの中に入っている。

当たり前前の道がありがたい

東京都・藤村女子中学校 原口 理央

私が小学生の時、いつも見守ってくれた人がいました。それは、通学途中にある、スーパーの駐車場の警備員の方です。私はその方の名前も年齢も知りません。なのには毎日通学している私を見守ってくれました。

ある日、その方はいつもの場所にいまませんでした。次の日もその日もいませんでした。その時、私は初めて気づきました。その警備員の方が毎日してくれたおかげで安心して学校に行っていたのだ。それから一週間が経った日に、その警備員の方が元に戻っていました。その時に私は聞きました。「今までどうしていなかったのですか。」すると警備員の方は「ちょっとがなが見つかっちゃってね。検査入院をしたんだ。」と言われました。私は何も言えず、今まで通りいってきますと言って通学しました。

次の日、笑顔でおはようと言った後に、警備員の方はありがたうと言いました。そして、「明日からまた入院してがんの治療をするから会えなくなっちゃうんだ。毎朝、君のキラキラな笑顔と元気な声で元気をもらっていたよ。しばらくはいいないけど、頑張っつね。私も頑張るから。」と言われ、私から出た言葉は「うん。」の一言だけでした。ありがたうという言葉が生まれました。

毎日、安心して通学できたのは警備員の方のおかげで、感謝しなければいけないのは私の方なのにならなくていいです。そんな後悔が残ったまま、一年と六ヶ月が過ぎたある日、通学をする、あの警備員の方がいまいました。そこで私は「あの時、ありがたうって言葉なくてごめんさい。いつも助けられていたのは私なのに。」と言いました。すると、「助けてもらっているのはこっちだよ。君の笑顔を考えてたら勇気をもらえたんだ。こちらこそありがたう。」と言われ、とてもうれしくなりました。そして、小学校卒業の日、しっかりと感謝を伝えられました。「今まで支えてくれて、助けてくれてありがとう。」と。私はこの話を通して、助けることで助けられるということが分かりました。今、警備員の方が何をしようとしているのかは分かりませんが、あの時、互いに助け、助けられていたのは間違いありません。助け合いをしたことで笑顔が生まれ、その人の人生を変えることができます。助けるのには勇気があることだけれど、助けた経験は次々にながっていき、やがて社会を大きく変えることができるのです。「助け合い」それは、人生の分岐点。自分ができることを今やる。